

プロスポーツチームによる地域愛着に地元メディアが与える影響 —2004年、北海道新聞は北海道日本ハムファイターズをどう伝えたのか—

The impact of local media on community attachment by professional sports teams
—How did the Hokkaido Newspaper report on the Hokkaido Nippon-Ham Fighters in 2004?—

田 島 良 輝（大阪経済大学人間科学部准教授）

Yoshiteru TAJIMA (Osaka University of Economics, Faculty of Human Sciences, Associate Professor)

藤 原 真由美（大阪経済大学大学院人間科学研究科修了）

Mayumi FUJIHARA (Graduated the master's program at the Osaka University of Economics graduate School of Human Sciences)

鳥 山 稔（至誠館大学現代社会学部助教）

Minoru TORIYAMA (Shiseikan University, Faculty of Sociology, Assistant Professor)

西 村 貴 之（金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科教授）

Takayuki NISHIMURA (Faculty of Human Sciences, Department of Sports Science, Professor)

佐々木 達 也（城西大学経営学部教授）

Tatsuya SASAKI (Josai University Faculty of Management, Professor)

池 田 幸 應（金沢星稜大学人間科学部スポーツ学科教授）

Yukio IKEDA (Faculty of Human Sciences, Department of Sports Science, Professor)

〈要旨〉

本研究の出発点は、藤原（2021）の提示した、ファイターズのコアファンが抱くチームへの家族的な愛情は、北海道という地域社会全体の社会意識と重なり合うのではないかと、いう着眼であった。そこで、本稿では、藤原の指摘する地元メディアの影響について、分析を行うことにした。研究の目的は、北海道新聞のファイターズ関連記事報道量を把握することと、記者は、どのような価値観でファイターズを捉えていたのかを明らかにすること、以上の2点とした。

その結果、年間をとおしてスポーツ面以外でも毎月定期的に記事が掲載されており、4月～9月のシーズン中では、おおよそ3日に1回のペースで記事掲載されていることがわかった。スポーツ面だけでなく、社会面や地域面で大量かつ定期的にファイターズの記事が掲載されているということは、地元メディアが社会的な現象としてファイターズを捉えていることの証左といえるだろう。また、後者の目的である、ファイターズをどのような価値観で捉えているのかについては、近代家族的な目線、チームと地域社会が関係し合うことへの肯定的な視点で、記事が制作されているという特徴を示唆することができた。

〈キーワード〉

地域愛着、批判的ディスコース分析（CDA）、近代家族

1 はじめに

1-1 問題の所在

スポーツが持つまちづくりの促進機能について、近年では多くの関心が寄せられている⁽¹⁾。スポーツと地域に関する研究は1960年代頃からみられるようになったが、当時は学校以外の地域で行う社会体育やコミュニティスポーツを対象とする研究が中心であった。このようなスポーツの普

及という観点ではなく、スポーツの力を活用して地域の現状を変えていくという、スポーツによるまちづくりに注目が集まってきたのは1990年代頃からになる。

広瀬（2004）は、日本と韓国で共催された2002 FIFAワールドカップを題材に、10の開催都市（日本国内）の活性化効果について25の質問項目から事後検証を行った。

その結果、組織の最終的な目標にあたる成果を明確に定

義すること、つまり、スポーツイベントを開催する自治体にとって、イベントが盛り上がることを成果として捉えるのではなく、盛り上がったイベントをどのようにまちづくりの目標へ結びつけていくのか、という観点の重要性を指摘した。この指摘は、以降のスポーツまちづくり研究に大きな影響を与えることになる。山口（2018）は、スポーツイベントの経済効果について「イベント開催に伴う経済効果」「インフラの整備促進」「雇用の増加」「投資の増加」「物価上昇」といった研究群があること、木田（2013）は、スポーツイベントの開催による社会的効果を ①地域情報の発信 ②地域のスポーツ振興 ③国際交流の推進 ④青少年の育成 ⑤ボランティア・NPOの育成 ⑥地域アイデンティティの醸成 ⑦地域活動の促進 ⑧地域間・地域内交流の促進の8つに大別するなど、スポーツイベントによるまちづくりの成果が明確に示されるようになっていった。

表1. プロスポーツの地域活性化効果

経済的効果	○経済・産業復興効果
	・グッズや商品の製造・販売
	・来訪者の増加による既存の観光産業の復興
	・スポーツ用品の製造・販売促進
	・イベントや大会などの入場料収入や飲食の消費拡大
	・雇用促進効果
	○施設・基盤・都市環境などの整備効果
社会的効果	・スポーツ施設、周辺の公園、交通機関、景観などの環境整備
	・整備による産業の誘発
	○地域のアイデンティティの形成効果
	・地域の知名度の向上
	・地域のイメージの向上
	・住民の地域に対する帰属意識の高揚
	○地域コミュニティの形成効果
	・住民意識の変革と連帯感の高揚
	・住民、企業、行政の連携
	・他の地域との交流促進
	○人材育成効果
	・スポーツ競技者、指導者、ボランティア
	地域活動のリーダーなどの人材育成
	○地域社会に対する教育の推進
	・地域美化意識、環境保全意識の向上
	・地域ホスピタリティ意識の向上
	・青少年への夢と希望の提供

出所) 藤原 (2021)

本研究はプロスポーツによるまちづくり効果を検討するものである。当該地域の活性化効果については、多くの場合、経済的効果と社会的効果の両面（表1）が示されるが、今回は、社会的効果、なかでもプロスポーツによる地域愛着の形成に焦点を当てている。

プロスポーツチームによる地域愛着の形成に関する研究は、これまでも二宮（2011）、藤本（2011）、松本（2015）、菅（2017）などの成果がある。例えば、松本は、地元プロスポーツチームのチームへの愛着心を「非ファン」「一般ファン」「熱狂的ファン」の3段階に分類し、チーム愛着レベルが高いほどチームを肯定的に捉え、地元地域への愛

着が高いことを明らかにするなど、主に量的なアプローチで、チームへの愛着が高くなると地域への愛着も高まっていくという結論を示した。

それに対して藤原（2021）は、これまでの研究ではチームへの愛着が地域への愛着に影響を与えるのかという影響の強弱を明らかにしようとした研究であったため、どのような背景やプロセスでチームへの愛着が地域への愛着につながっていくのかが明確になっていないと指摘した。そこで藤原は北海道日本ハムファイターズ（以下 ファイターズと略す）のコアファンの地域愛着の形成プロセスを明らかにするために、質的研究のなかでも分析焦点者の「うごき」を説明しようとするM-GTA⁽²⁾を用いて分析を行った。藤原が提示した結論には、いくつか注目すべき内容が含まれていたが、本研究との関連⁽³⁾において、ここではファイターズのコアファンはチームに対して家族的な愛情を抱いており、その感情が北海道という地域全体にもひろがっているのではないか、という示唆に着目した。

なかでも、藤原の提示する、チームへの愛着が地域全体へ広がる契機には、大量に、かつ好意的にファイターズを報道する地元メディアの影響が大きいとの仮説について、本稿では特に検討をしたいと考えている。

1-2 研究の目的

以上のような問題意識から、本研究では2つの研究目的の達成を目指している。ひとつめは、地元メディア（＝北海道新聞⁽⁴⁾）が地元プロ野球チーム（＝北海道日本ハムファイターズ）をどれくらいの報道量で伝えていたのか、量的な面での実態把握を行う。

ふたつめについては、北海道新聞がファイターズをどのような切り口で報道をしていたのか、どのような解釈枠組み・価値観でファイターズを捉えていたのかについて明らかにしていくことである。

1-3 研究の方法

1-3-1 研究の方法

ひとつめの報道量の量的な把握については、ファイターズが東京から北海道へ移転をした2004年の1月から12月の北海道新聞をすべてチェックし、1面、社会面、札幌圏という地域面、それから特集記事についてファイターズ関連記事の見出し、写真の内容、登場人物、記事内容という観点で一覧表を作成した。

ふたつめの北海道新聞がどのような解釈枠組み・価値観でファイターズを捉えていたのかの解明については、2004年4月から9月のレギュラーシーズン中のスポーツ面に掲載された特集記事について、ヴァン・デイク（Teun A. van Dijk 以下デイクと略す）の「ニュースの分析理論」

という方法枠組みを用いて分析を行った。

1-3-2 ヴァン・ダイクの「ニュースの分析理論」

1) 「ニュースの分析理論」採用の理由

記事内容に関する分析について、ここではダイクのニュースの分析理論を用いた。この手法は、CDA (= 批判的ディスコース分析 Critical Discourse Analysis) の一連の研究⁵⁾に位置づけられるもので、主にメディア研究で活用されている。

マス・コミュニケーションに関する研究を概観すると、送り手の伝えるメッセージがどれほど視聴者や読者に伝わっているのかを測定する効果研究、視聴者や読者がどのようにメディアのメッセージを解釈しているのか、読み手の意味付与の解明に力点を置いた研究、そして、送り手と受け手の間を流通する言語や記号というメッセージを分析する研究に分けることができる。

ダイクの分析枠組みは、最後にあげたメッセージの内容を分析するアプローチになる。この方法論の特徴的な点は、記事内容の分析をととして、ニュースの製作者とニュースの読み手が共有する解釈枠組みを解明できる点にある。それゆえ、本研究で明らかにしたい地元紙 (= 北海道新聞) が、どのような価値観で地元プロスポーツチーム (= 北海道日本ハムファイターズ) を捉えているのかを明らかにすることができる考えた。

2) ニュースの構造

ニュースのように組織内で日常的に編集、制作されるものは一般的に物語という形態上の基準形を持っている。

新聞記事の場合は、①見出しとリード (記事を要約した部分) ②出来事 (そのニュースの事実関係) ③背景 (文脈や経緯についての解説) ④結果 (出来事に関する関係者の談話など) で構成される。客観的な報道を心がけて、多角的な視点で記事は書かれているが、最終的には「見出し」という最も伝えたいことに話が収斂していくという構造になっている。

では、さまざまな視点で書かれた文の集まりをどのようにすれば、テーマにそった一貫性をもつ記事にまとめることができるのだろうか。この点については、マクロ・ルール (要約の法則) を活用する。マクロ・ルールとは、①テーマに直接関連づかない内容は「削除」する ②鉛筆、消しゴム、筆箱を文房具と呼ぶように「一般化」して置き換えていく ③命題の連鎖をディスコース全体の行為を表すマクロ命題につなげるように構築するという原則である。つまり、テーマにつながる文として何を残し、何を残さない文として削除するのか、この何を残し、何を削のか、という判断部分にニュース製作者の価値観が現れるという考え方である。(斎藤, 1998, 2001)

3) 分析の手順

具体的には、以下の4つの分析軸を設定し、検討を進めた。(図1)

①アクター/スピーカー (誰が登場し、何を語っているか。メディアが、アクター/スピーカーを紙面でどのように表しているのかを検討する) ②テーマ (見出しと本文内容をマクロ・ルール<要約の法則>の照合することで、その記事のテーマを析出する) ③フレーム実践 (見出しと本文内容、マクロ・ルールの照合から作り手のフレームを析出する。その物語を一貫性のあるものにするためには、どのようなフレームでディスコースが捉えられているのかを考える) ④ジャンル (どの面に掲載されているか) の4つの位相を設定して分析を行った。(田島, 2005)

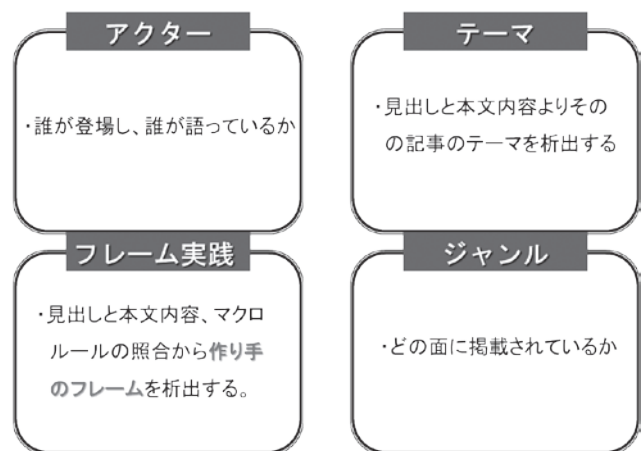


図1. ニュース分析の4つの軸

出所) 筆者作成

2. 結果と考察

2-1 報道量の実態把握—地元新聞はファイターズを大量に、かつ好意的に伝えたのか?—

2-1-1 全体的な傾向



図2. 一面、社会面、地域面の掲載回数 (2004年度)

出所) 筆者作成

一面には、年間をととしてファイターズ関連の記事が23回掲載されていた。社会面では58回、地域面にも91回の掲載があった。月別の掲載回数の変化をみても、年間をと

して定期的にファイターズの記事が報道されていることを確認できた。(図2)

2-1-2 社会面掲載記事の傾向

次に、社会面に掲載されたファイターズ関連記事の見出し、写真、登場人物、記事内容をまとめて一覧を作成した。

その結果、もっとも多く登場した対象は、1番が「選手」(28.1%)、2番目が「ファン」(25%)、3番目が「チーム」(17.2%)であった。また、見出しや記事内容から何をテーマにした記事であったのかをまとめたところ、「ファンのようす」(17.5%)、「選手の動向」(15.9%)、「地元のようす」(11.1%)という順になっていた。

2-1-3 特集記事の傾向

1年をととして特集記事も企画されており、朝刊の札幌圏には「がんばれファイターズ」、夕刊には「ボールパーク」という特集記事が掲載されていた。「ボールパーク」は1年間で29本、「がんばれファイターズ」は4名の識者⁽⁶⁾によるリレーエッセーで、年間54本の記事が掲載されていた。

内容については「ボールパーク」は野球に関する内容が中心になっているのに対して、「がんばれファイターズ」は野球のプレイ以外の部分、例えばファンの動向や北海道の地元情報など、ファイターズと関連づけて広い視野で執筆される傾向がみられた。ただし、「ボールパーク」の野球に関する記事も裏方としてチームを支える人や、選手を特集する場合も、若手有望株の選手や地元出身選手の現況を取り上げるなど、いわゆるスター選手だけではなく、普段なかなかスポットライトが当たらない人を中心に上げている点は特徴的であった。

2-1-4 まとめ

地元新聞社である北海道新聞が、ファイターズ北海道移転元年の2004年に、どれほどの報道量で記事を掲載していたのかについて、ここまで分析を行ってきた。

その結果、年間をととしてスポーツ面以外でも毎月定期的に記事が掲載されており、4月～9月のシーズン中では、おおよそ3日に1回のペースで記事掲載されていることがわかった。スポーツ面だけでなく、社会面や地域面で大量かつ定期的にファイターズの記事が掲載されているということは、地元メディアが社会的な現象としてファイターズを捉えていることの証左といえるだろう。

社会面では、「選手」(28.1%)や「チーム」(17.2%)を対象とする記事と同じくらい、「ファン」(25%)が紙面に登場する機会が多くみられた。また、(写真1)のように、

選手とファンをセットにして、記事にする傾向も社会面でみられる特徴である。



写真1. 社会面に掲載された記事 (2004年2月2日)

特に、シーズン前やシーズン前半の時期には、球団全体の行事にもかかわらず、新庄選手だけを取り上げたり、新庄選手と関連づけて記事をつくる傾向が多くみられた。移転初年度のシーズン前やシーズン前半は、ファイターズというチームや個々の選手の認知が北海道民に広がっておらず、当時、すでに全国区の知名度を持っていた新庄選手をアイコンにして、読者の目を引こうというねらいがあったと推察された。

最後に特集記事については、野球だけでなく、野球とかわりのある地域社会での出来事を取り上げていたり、野球関連の記事であっても、スター選手ばかりを対象とするのではなく、裏方や地元出身選手について掘り下げた記事を掲載するといった傾向がみられた。

以上をまとめると、年間をととして野球の試合以外を含めた大量の記事が掲載されていたことを確認できた。社会面では、チームの知名度が低かったシーズン当初は、特にスター選手をアイコンに読者の関心を集め、一方で、特集記事では、チームを支えるスタッフの取り組みや地元選手の現状を深掘りするなど、記事掲載のタイミングと内容のバランスがとられた紙面構成であった。

また、全体としてチームとファンの関係性や一体感を強調する内容も多くみられた点についても特徴のひとつとして記しておきたい。

2-2 記事内容の分析—地元紙はファイターズをどのような解釈枠組み・価値観で捉えていたのか？—

北海道新聞のスポーツ面には、ファイターズの試合を伝える際に2つの特集記事がある。ひとつが「インサイド」であり、もうひとつが一人の選手に焦点をあてた特集記事である。

ここでは、スポーツ面に掲載された2つの切り口の特集

記事すべてを対象に、デイクが示した4つの分析軸（アクター、テーマ、フレーム、ジャンル）を用いて一覧表を作成し、分析を行った。その結果、5つの代表的な（頻出した）フレーム＝解釈枠組みが提示されることになった。

2-2-1 チームの一体感という解釈枠組み

2004年 5月19日(水)対千葉ロッテ戦 6-5で9回に逆転勝ちをおさめた試合翌日の特集記事・インサイド。

アクター

登場人物、アクターは、ベテラン野手の奈良原選手、ヒルマン監督、白井ヘッドコーチの3名のコメントが記されていた。

「チーム一丸の勝利だ」（奈良原選手）、「ブルペンの勝利だ」（ヒルマン監督）、「一略— この勝利は大きい。最高の勝ち方」（白井ヘッドコーチ）といったコメントが、伏兵と表現された主力選手以外の活躍と合わせて掲載されていた。

テーマ

作り手の最も伝えたい情報が載せられる見出しには、「チーム一丸 連敗脱出」とあり、その右横には決勝打を放った石本選手のバッティング写真が掲載されていた。

フレーム

記事内容をマクロ・ルールで検討した結果、この試合はエースや主力打者の力ではなく、控え野手や中継ぎ投手の活躍で連敗を脱出したことが、見出し内容につながっていることから、チーム全員の力で獲得した勝利という点に記者が価値をおいて伝えようとしていることが示されていた。

2-2-2 支えあうチームの和という解釈枠組み

2004年 5月13日(木)対千葉ロッテ戦 20-2で勝利をおさめた試合翌日の特集記事・インサイド。

アクター

登場人物は、ファイターズ移籍後初勝利をあげた入来投手、控え捕手の実松選手、チームの顔でもある新庄選手の3名のコメントが記されていた。

「長かったですからね。（チーム）に感謝しています」と入来投手、控え捕手で、当日は入来投手とバッテリーを組んでいないものの、春季キャンプで入来投手の球を受けたときからその活躍を信じていた実松捕手は「一級品です」とコメントした。また、ファインプレーでピンチを救った新庄選手の「入来さんを楽しませてあげたかった」というコメントも掲載されていた。

テーマ

紙面全体の見出しには「入来、男泣き1勝 故障、移籍…2年ぶりマウンド」とあり、特集記事の見出しとしては

「チーム全員もり立て「感謝しています」入来」が、力投する入来投手の写真と合わせて載っていた。

フレーム

ケガに苦しみ、この日が2年ぶりの登板となった入来投手。ジャイアンツからのトレードも経験し、新たなチームメイトとなったファイターズのナインからの信頼、入来投手を勝利投手にしたいという周囲の思いが、テーマである見出しにつながる構成になっていた。チーム一丸のなかでも、お互いが支えあい、励ましあうことでチームがひとつになっていく、支えあうチームの和という観点で記事が作られていることが示されていた。

2-2-3 フォア・ザ・チームという解釈枠組み

2004年 7月25日(日)対オリックス戦 4-6で敗れたものの、チームの主力である小笠原選手が通算1000本安打を達成した試合翌日の特集記事。

アクター

特集記事中には、記録を達成した小笠原選手のみが登場する。球団最速の862試合目で記録を達成したことに対して「監督やコーチ、裏方、ファンの応援があったからこそ。感謝したい」、「勝っていれば、声も弾んだらうけど。記録のためにやっているんじゃないので…」というコメントが掲載されていた。

また、特集記事の後半部分に2人の娘から花束を受け取った場面についての感想を求められると「いい思い出になると、（球団に）頼んでやってもらいました」とのコメントがあり、記者の『このときばかりは、いつもの勝負師のまなごしは消え、やさしいパパがそこにいた』という文でしめくくられていた。

テーマ

全体に大きく横書きで記された「小笠原1000安打」の下に、縦書きで書かれた「素直にうれしい。だけど記録より勝利」の特集記事の見出しがある。特集記事枠内には、表情を緩めないまま、ファンの声援に両手を挙げて応える小笠原選手の写真も掲載されていた。

フレーム

球団最速で1000本安打を達成したという事実に対して、記事本文中に記された個人的な喜びを表した部分は削除され、見出しに残されたのは「記録よりも勝利」というコメントとメモリアルデーにもかかわらず、少し浮かない顔で声援に応える小笠原選手の写真が示されていた。

以上記事と写真から、記者は、フォア・ザ・チームというフレームでプロスポーツチームを捉え、記事が制作されていたことが推察できた。

2-2-4 成長を見守る視線という解釈枠組み

2004年 9月4日(土)対西武ライオンズ戦 3-2でサヨナラ勝ちをおさめた試合翌日の特集記事。

アクター

アクターは、ヒルマン監督とプロ入り4年目で初のサヨナラヒットを打った木元選手の2人である。ヒルマン監督の「素直に思いっきり行け」「三振も多いが使い続けて良くなる選手。だから毎日使うんだ」と、木元選手の「いつもは(殊勲の選手の)頭をたたく方なのに」「結果がで良かった」「これからのいいところで打てる選手に」初々しさと期待に応えられたことへの満足感が入り混じったコメントが掲載されていた。

テーマ

紙面全体の見出しには「木元 サヨナラ打」とあり、特集記事の見出しとしては「「将来の主軸」殊勲」が、サヨナラ打を打った場面の写真と合わせて構成されていた。

フレーム

今はまだチームの主力とは呼べない発展途上の段階ではあるが、「三振も多いが使い続けて良くなる選手。だから毎日使うんだ」の監督コメントにあるように、成長を期待して「素直に思いっきり行け」と背中を押す。

将来の飛躍に向けて温かく育てていくという視点が、ここで用いられた解釈枠組みだと考えた。

2-2-5 チームとファンの一体化という解釈枠組み

2004年 9月22日(水)対ダイエーホークス戦 7-3で勝利をおさめ、プレーオフ進出に向けて暫定マジックをあとしつつにした試合翌日の特集記事・インサイド。

アクター

登場人物は、反撃ののろしを上げるホームランを放った島田選手にくわえ、チームの主力選手である新庄選手、小笠原選手のコメントが掲載されていた。

それぞれ、「これだけ多くのファンが応援してくれてる。これで乗っていききたい」(島田選手)、「チームもスタンドもひとつになっている。守っていても打席に入る時も感激する」(新庄選手)、「ファンと選手が一体になっていると実感できる」(小笠原選手)といったコメントが記されていた。

テーマ

特集記事の見出しは、「大声援後押し チームに勢い」と強調した字体で書かれていた。

フレーム

特集記事冒頭の文章は『札幌ドーム満員の4万3千人の声援の波に日本ハムナインが乗った』とはじまっている。また、アクターとして登場する3人の選手のコメントをみてもわかるように、ファンと選手が一体になることに価値

を置いて記事が形成されていることがわかった。

2-3 分析結果のまとめと若干の考察

2-3-1 分析結果のまとめ

ファイターズという地元のプロ野球チームを地元メディアがどのような解釈枠組みで報道していたのかについて、ここまで分析を行った。

その結果、5つの代表的な解釈枠組みを析出することができた。ひとつめは、ファイターズはチームの勝利(優勝)という目標に向かって、一体感を持って戦う集団である(2.2.1)という価値観である。そして、一体感を持つチームは、自分個人のことでよりチームの勝利を大切にするというフォア・ザ・チームの精神を持っていること(2.2.2)、お互いのミスを補い合う支えあいの精神があること(2.2.3)が、強調されていた。

また、本稿では監督と選手という関係性のなかで選手の成長を後押しする記事を用いたが、その他の記事でもチームの成長を、ときに我慢をしながら見守ろうとするファンの思いが示された記事もみられた。選手個人やチーム全体が成長して変わっていく姿、それをあたたかく見守りつつ、後押しをするという視点(2.2.4)は、地元プロスポーツチームを報道する際の特徴的な解釈枠組みではないだろうか。

5つ目に示した解釈枠組みは、ファンと選手の一体化という枠組み(2.2.5)で書かれた記事である。長いシーズンのなかでは、さまざまな場面が訪れる。チームとファンは、その悔しさ、喜び、落胆といった感情を共有していくことをとおして、一体感を深めていったものと推察した。

2-3-2 若干の考察

1) 支配的意味と優先的な読み取りについて

ニュース報道は多様な読みに関われた映画やドラマなどとは違い、情報を一定の方向に導こうとする特徴があるため、閉じたテキストと呼ばれている(斉藤 1998)。それゆえ、ニュースは社会の支配的、多数派の見方を増強する傾向があるとも指摘される。

ニュースの読み手がニュースを理解できるのは(その内容について賛成であれ、反対であれ)、ニュースの制作者と読み手との間で、記事内容を理解するための前提=社会的認識=解釈枠組みが共有できているからだといえる。ニュース制作者は想定する読者に向けて、彼(女)らと共有できるであろう解釈枠組みを選択して、記事を書く。特にマスを対象としたコミュニケーション活動を行う場合、社会(今回の場合、北海道という地域社会のなかで)で多数の合意が得られであろう見方を埋め込んで、記事を書いていくことになる。それゆえ閉じたテキストであるニュース

報道は、社会の支配的な見方を再生産するという傾向を強めていく。

このようにして構築されたニュース言説は、当然のことながら中立的なものにはなりえない。記事は特定の意味づけによって支配され、読み手はその支配的な意味を優先的に読み取るように誘導される。当然、読者は、必ずしも送り手が意味づけした言説の支配的な意味を優先的に読み取るわけではないが、読者は解釈枠組みを共有しているので、共感せずとも理解することは可能だ。このようにニュースの制作者と読み手の間には、支配的な意味付与とその優先的な読み取りという関係性が、構造的に生まれるのである。

今回の分析では5つの解釈枠組みを提示した。ただし、この5つの解釈枠組みを精緻にみると、大きく2つに分けることができる。それは、〈チームの一体感〉〈支えあうチームの和〉〈フォア・ザ・チーム〉〈成長を見守る視線〉というチームの凝集性を示す解釈枠組みと〈チームとファンの一体化〉のように、ファイターズとファン、ファイターズと地域社会の親密な関係性を示す解釈枠組みの2つである。

地元メディアが地元プロスポーツチームを報道する際に用いるこの2つの解釈枠組みは、なぜ生成されたのだろうか。以下の考察において、その社会的背景を含めて検討を行うこととした。

2) 家族的という解釈枠組み

競技集団としてのプロスポーツチームの目標は、当然ながらチームの勝利であり、最終的には優勝ということになるだろう。それゆえ、組織の目標に向かってメンバーが協力しあい、一体感を高めていくスポーツチームは、「排他的で等質的な価値をその成員に共有」(斎藤, 2006)することを求める共同体的な組織になっていく傾向がある。

本分析において、北海道新聞は〈チームの一体感〉〈支えあうチームの和〉〈フォア・ザ・チーム〉〈成長を見守る視線〉という切り口でファイターズを報道していたということを示したが、これらの解釈枠組みは「家族構成員相互の強い情緒的関係」「子ども中心主義」「家族の集団性の強化」「非親族以外の排除」という視点において、近代家族の定義⁷⁾と多くの部分で重なり合う。

ニュースの制作者は想定する読者に向けて、彼(女)らと共有できであろう解釈枠組みを選択して記事を書く、これまで指摘をしてきた。ということは、北海道の地元メディアと住民が、ファイターズを構成員相互の信頼と愛情を基盤におき、成員の成長を重要視する、近代家族的な共同体として意味づけ、理解しているということを示唆していると言えるのではないだろうか。

3) ファンや地域社会との親密な関係性という解釈枠組み
本稿のはじめに部分でも記したが、近年、スポーツが持

つまちづくりの促進機能に注目が集まっている。今回研究対象に取り上げたプロスポーツにおいても、地域密着を理念に掲げた社団法人日本プロサッカーリーグの開幕を契機に、その考えや実践が広がっていった。ファイターズの北海道への移転も大きな時代の流れからみると、このようなプロスポーツと地域の新たな関係性のなかに位置づけることができるだろう。

ファイターズのコアファンのチーム愛着と地域愛着の関係性について、インタビュー調査をもとにモデル化を企図した藤原(2021)の研究では、コアファンの暮らす地域社会において、ファイターズが日々の生活に入り込んでいるようすや、季節を象徴する行事として暮らしのなかに組み込まれている状況が提示されていた。

以上のような社会的背景をふまえ、ニュースの制作者が、プロ野球チームとファンが一体化すること、地元のプロスポーツチームが地域社会のシンボルになっていくことを、社会の支配的、多数派的な見方として捉えてニュースを制作した結果が、記事として反映することになったのではないだろうか。

3. 結論と今後の課題

3-1 結論

本研究の出発点は、藤原(2021)の提示した、ファイターズのコアファンが抱くチームへの家族的な愛情は、北海道という地域社会全体の社会意識と重なり合うのではない、という着眼であった。今回、筆者らは藤原の着眼に注目し、プロスポーツチームへの愛着が地域への愛着につながるのであれば、地元メディアの影響が大きいのではないかという点に問題意識をもった。

検討の結果、地元紙である北海道新聞は、地元のプロスポーツチームであるファイターズを年間を通して大量かつ、バランスのとれた紙面構成で報道していること、近代家族的な目線、チームと地域社会が関係し合うことへの肯定的な視点で、記事が制作されているということを示唆することができた。

3-2 今後の課題

結論で述べたとおり、プロスポーツチームによる地域愛着の形成というテーマにおいて、地元メディアが大きくそれに影響を与えるのではない、という仮説を補強することはできた。しかし、本研究プロジェクトは、まだ萌芽段階にあり、今後に取り組むべき課題も多い。

まずは、前提となるチーム愛着と地域愛着の関係性について、さらに実証的な検証結果を積み上げていく必要がある。メディアの影響に関する研究についても、今回は移転当時の状況を把握するために2004年の地元新聞を対象に分

析を行ったが、当然ながら現在（2021年）と当時では、地元新聞社の地域での立ち位置といった社会経済環境や、インターネットやSNSの普及をはじめとするメディア環境

は大きく変化をしている。今後は、それらの変化を踏まえた継続研究の必要性があると考えている。

注

- (1) 地域スポーツやスポーツによる都市や地域の活性化に関する政策立案の機会が増えており、例えばH28年度「総合型地域スポーツクラブの在り方に関する検討会議」R2年度「地域スポーツ振興組織の在り方検討会」（いずれもスポーツ庁）や、内閣府においても、R1年度策定の「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」において「スポーツ・健康まちづくり」の項目が追記されるといった動きがみられる。
- (2) 人間を対象にあるうごき（プロセス）を解明しようとする質的研究法のひとつである。Glaser&Straussが発案したグラウンデット・セオリー・アプローチ（Grounded Theory Approach）のコーディング方法等を修正した木下（2007, 2010）の手法を採用している。
- (3) 本稿の内容は、日本地域政策学会で筆者らの研究グループが採用された「プロスポーツとまちづくり」（2020年度～2022年度）プロジェクト研究の成果の一部をまとめたものである（2021年6月19日の学会大会・分科会で発表）。当日の分科会では、共同執筆者・藤原の「北海道日本ハムファイターズファンのチーム愛着と地域愛着の関連性」での報告を足掛かりに、メディアの影響「プロスポーツチームと地元メディアの関係性—北海道新聞は北海道日本ハムファイターズをどのように伝えたのか—」（筆者）、チームの地域貢献活動の影響という観点から「プロスポーツチームの地域貢献活動—北海道日本ハムファイターズはいかにして地域に密着していったのか—」（共同執筆者の鳥山、佐々木）の3演題を報告し、ディスカッション（担当は共同執筆者の西村、池田）を行った。
- (4) 北海道で発刊されるブロック紙。2021年1月時点での朝刊発行部数は88万部（日本ABC協会）。ファイターズの出資企業の1社でもあり、オフィシャルスポンサーでもある。ファイターズオフィシャルグラフィックス等の書籍の発行を担当するなど、両者には大変深い結びつきがある。
- (5) CDA分析は、1970年以降、言語学、記号論、社会学などの幅広い研究領域から生まれたディスコース研究である。代表的な研究には、ヴァン・ダイク（Teun A. van Dijk）のNews as Discourseやフェアクラフ（N. Fairclough）のMedia Discourse 等がある。
- (6) えのきといちろう（コラムニスト）、棟方悦子（実業家）、玉木正之（スポーツジャーナリスト）、広瀬哲郎（ファイターズOB選手）の4名であった。
- (7) 家族社会学者の落合恵美子（1996）は、近代家族を「家内領域と公共領域の分離」「家族構成員相互の強い情緒的関係」「子ども中心主義」「男は公共領域、女は家内領域という性別分業」「家族の集団性の強化」「社交の衰退とプライバシーの成立」「非親族の排除」「核家族」以上の8つの特徴を持つものとして定義した。

引用・参考文献

- I. 藤本淳也, Jeffrey D. James, 奥永憲治, 梅本祥子（2011）「Jリーグクラブの「ファンづくり」が「まちづくり」に及ぼす影響に関する研究—ホームタウン住民のチーム・アイデンティティと地域意識に注目して—」, 『2011年度笹川スポーツ研究助成研究成果報告書』, 笹川スポーツ財団。
- II. 藤原真由美（2021）「北海道日本ハムファイターズファンのチーム愛着と地域愛着の関連性」, 大阪経済大学人間科学研究科 修士論文。
- III. 広瀬一郎（2004）「W杯の事後検証—自治体による検証はなされたのか—」, 独立行政法人経済産業研究所, vol.2.
- IV. 菅文彦, 古川拓也, 船橋弘晃, 間野義之（2017）「スポーツ観戦意図及び行動と地域愛着の関係分析：FC今治を事例として」, 『スポーツ産業学研究』, 日本スポーツ産業学会, 27巻3号。
- V. 木田悟（2013）「地域社会を活かす スポーツによる社会的効果とは」, 木田悟ほか 編『スポーツで地域を拓く』, 東京大学出版会。
- VI. 木下康仁（2007）『ライブ講義M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデット・セオリー・アプローチのすべて』, 弘文堂。
- VII. 木下康仁（2020）『定本—実践の理論化をめざす質的研究方法論』, 医学書院。
- VIII. 松本耕二, 渡辺泰弘（2015）「地元プロ・スポーツチームのチームイメージ、チーム同一性と地域愛着」, 『広島経済大学研究論集』, 広島経済大学経済学会, 38巻3号。
- IX. 二宮浩彰（2011）「プロスポーツ観戦者行動におけるチームに対する愛着とホームタウンへの地域愛着」, 『同志社スポーツ健康科学』, 同志社大学スポーツ健康科学会, 3号。
- X. 落合恵美子（1996）「近代家族をめぐる言説」, 『岩波講座現代社会学』, 19巻, 岩波書店。
- XI. 齋藤純一（2006）「公共性」大庭ほか編, 『現代倫理学辞典』, 弘文堂, p264.
- XII. 齊藤正美（1998）「クリティカル・ディスコース・アナリシス—ニュースの知/権力を読み解く方法論—新聞の「ウーマン・リブ運動」（1970）を事例として」, 『マス・コミュニケーション研究』, 日本マス・コミュニケーション学会52号。
- XIII. 齊藤正美（2001）『フェミニズム理論による批判的ディスコース分析（FCDA）の展開—ウーマン・リブ運動のメディア言説を事例として』, お茶の水女子大学 博士論文。
- XIV. 田島良輝（2005）「全国紙が構築したスポーツの価値—2002 FIFAワールドカップを事例として—」, 濱口晴彦 監修・海野和之 編, 『社会学が拓く人間科学の地平—人間を考える学問のかたち—』, 五弦社。
- XV. Teun A. van Dijk, 1988a, News as Discourse, Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates
- XVI. 山口志郎 ほか（2018）「スポーツイベントが開催地域にもたらす効果：先行研究の検討」, 『体育学研究』, 第63巻 第1号。（新聞記事）
・北海道新聞2004年1月1日から12月31日